

雨合羽をんな遍路を繭となす

藤田湘子

雨合羽を着た女遍路を、これまで誰が「繭」と思っただろう。しかも、実に色っぽい。半透明の雨合羽に透ける女人の曰く言い難い過去までも想像される。こんな句を上等の「見立て俳句」と呼ぶのだろう。比喻の一句として「さすが湘子！」と、称賛し惚れてしまう。

湘子が六十歳で書いた『実作俳句入門』の序にかえての一節に「俳句は教壇に立つて、上から見下ろして教えるといったていのものではないと、私は思っています。どちらかというと、焼鳥屋で一杯やりながらの会話という感じの中で、俳句のなんたるかがわかっていく、そういうものだと考えています」とある。また、作句のテクニクには十六の解説。その八番目が、比喻であった。

1991年(53作) 第九句集『前夜』 鑑賞・轍郁摩